



TITLE:

# 医療機関の管理会計システムとミドルマネジメントーミドルマネジメントによる組織内調整の観点からー( Abstract\_要旨 )

AUTHOR(S):

井上, 秀一

---

CITATION:

井上, 秀一. 医療機関の管理会計システムとミドルマネジメントーミドルマネジメントによる組織内調整の観点からー. 京都大学, 2016, 博士 (経済学)

ISSUE DATE:

2016-03-23

URL:

<https://doi.org/10.14989/doctor.k19462>

RIGHT:

学位規則第9条第2項により要約公開

( 続紙 1 )

京都大学	博士（経済学）	氏名	井 上 秀 一
論文題目	医療機関の管理会計システムとミドルマネジメントーミドルマネジメントによる組織内調整の観点からー		
<p>（論文内容の要旨）</p> <p>本論文は、医療機関の管理会計システムにおけるミドルマネジメントの役割について、「吸収役」（absorption）と「双方向の窓」（Two-way Windows）という2つの機能に焦点を当て、地域中核医療機関でのエスノグラフィックな調査から得られたデータを基に検討した論文である。</p> <p>第1章では、本論文の背景となる問題意識が述べられ、医療機関において、管理会計システムがミドルマネジメントによる組織内調整プロセスとどのように関わっているのかを解明するという目的が提示されている。</p> <p>第2章では、医療機関における医療専門職の重要性に着目し、会計的管理と医療専門職の関係に関する先行研究の整理が行われている。その結果、先行研究においては、管理会計システムを活用した会計的管理に対する医療専門職の反応が、「抵抗」と「受容」の2つの場合に分けられて分析が行われていること、そのなかでミドルマネジメントの役割として、抵抗の場合は「吸収役」が、受容の場合は「双方向の窓」の役割が果たされていると二分された議論の展開が明らかにされている。</p> <p>第3章では、第2章で示された「吸収役」と「双方向の窓」というミドルマネジメントの役割について、さらに詳しく先行研究の批判的検討が行われている。その結果、先行研究がスタティックに「吸収役」と「双方向の窓」という役割を捉えていることが指摘されたうえで、「吸収役」と「双方向の窓」というミドルマネジメントの二つの役割が、外部環境の変化や組織内の状況に合わせてダイナミックに変わっていく可能性の検討が本研究の課題として提示されている。</p> <p>第4章では、本論文の研究課題を遂行するために、エスノグラフィックな研究方法を選択した理由が説明されている。エスノグラフィックな研究方法を適用するうえで注意すべき点について慎重な検討が行われ、研究方法と調査の概要の説明を中心としてリサーチデザインが示されている。</p> <p>第4章で提示されたリサーチデザインを踏まえ、第5章と第6章では、インタビュー調査と参与観察調査からなるフィールド調査から得られた知見について記述が行われている。第5章では、リサーチサイトである地域の中核医療機関における、経営管理システムの特徴について、管理会計システムを中心に示されている。インタビューデータから、赤字経営からの脱却を目指し、ガバナンスの改善を中心として経営管理システムの改善が始まり、理念コントロールと会計コントロールを両軸として、短期間で業績の改善が果たされた過程が説明されている。この過程においてミドルマネジメントは、理念の実現に向けチーム医療という観点から組織内調整を図っていることが明らかにされている。</p> <p>第6章では、「吸収役」と「双方向の窓」というミドルマネジメントの役割が、当</p>			

該医療機関の管理会計システムとの関連においてどのように果たされているのか、そのダイナミックな変化が、参与観察調査で得られたデータを基に詳述されている。トップダウンの形式で行われる予算管理システムの中で、ミドルマネジメントが現場のルーティンを維持するために「吸収役」としての役割を果たすことで、医療専門職は日常的な医療活動に集中できる。その反面、会計的管理が現場にまで徹底しないために、現場の活動は医療機関全体の業績から切り離された状態となる。そのような状態において、財務業績の悪化を契機として、ミドルマネジメントが「吸収役」から「双方向の窓」へと役割を変えるプロセスが描写されている。

第7章では、第5章及び第6章で行われた事例分析を基に、「吸収役」と「双方向の窓」というミドルマネジメントの役割が状況に応じてどのように果たされ、また、変化しているのかについて考察が行われている。

第8章では、本論文の総括が行われ、本論文の貢献と限界が述べられている。

(論文審査の結果の要旨)

本論文は、医療機関というプロフェッショナル組織における会計的管理の影響力について、ミドルマネジメントの役割に焦点をあてて分析したものである。本論文の最大の特徴は、プロフェッショナル組織における専門職と会計的管理の間のテンションを、ミドルマネジメントの調整能力に着目して分析しようとしたテーマ設定と分析視覚の独自性にある。英語圏を中心として既存研究において、ニューパブリックマネジメントに対するスタンスによって、一方では、会計的な管理を積極的に導入展開すべきという政策的主張と、それに対する批判として、会計的管理の導入が、医療活動を歪めてしまうという「会計化」(accountingization)の問題が指摘されてきた。この文脈において、ミドルマネジメントの役割を分析の俎上に載せ、「吸収役」と「双方向の窓」を鍵概念として分析することで、本論文は、医療機関における会計的管理の理解に新しい視角を提示している。これが本論文の第一の貢献である。

本論文の第二の貢献は、エスノグラフィックなフィールド調査に基づくリッチなデータを活用して、プロフェッショナル組織の会計的管理におけるミドルマネジメントの役割を分析していることにある。管理会計研究領域でも定性的研究方法の活用についての議論が近年急速に進展している。最新の研究方法と研究方法論の議論を念頭に、明確なリサーチデザインをもってフィールド調査を実施し、そのデータに基づいて、これまで十分に意識されてこなかった問題領域に光をあてることに成功している。本論文では、ケースサイトの全体像を把握するためにトップマネジメントとミドルマネジメントに対する24回のインタビュー調査をおこなったうえで、8ヶ月間フルタイムの参与観察を行い、体系的にデータを収集している。このことで、ややもすればイデオロギー的な議論に終始しがちなテーマにおいて、リアリティの高い理論的分析を行うことができていることは評価に値する。

本論文の第三の貢献は、スタティックに捉えられてきた医療機関の会計的管理におけるミドルマネジメントの役割のダイナミックな様相に光を当てたことである。既存研究では、「吸収役」としてミドルマネジメントの役割を理解する研究と、「双方向の窓」とする研究が、相対的に独立して進められてきており、そのいずれにおいてもミドルマネジメントの役割は固定的に捉えられる傾向にある。本研究は、ミドルマネジメントの役割がダイナミックに変化し、「吸収役」としての役割を果たしてきたミドルマネジメントが状況の変化によって、その役割を果たせなくなったり、「双方向の窓」としての役割を果たすように変化するプロセスを明らかにしている。このようなミドルマネジメントの役割のダイナミックな変化を明らかにしたのが本研究の第三の貢献である。

このように本論文は、分析視覚の新鮮さという観点からも、データのリッチネスを活用したダイナミズムの描写という観点からも、顕著な貢献が認められる。とはいえ、本論文にはいくつかの課題も残っている。まず先行研究の影響を強く受けてしまっていることが理由で、理論的発展の可能性が十全に実現できていないことがあげられる。リッチなデータを活用して「吸収役」と「双方向の窓」という鍵概念を理論的にさらに深めることができていたならば、本論文の価値はもっと高まったであろう。また、理論的一般化を進めることで、他のケーススタディとの接合性も高まるはずである。

もっとも、これらの課題は今後の課題としての意味を持ち、本論文の本質的な価値を低下させるものではない。本論文をさらに精緻化することで、医療機関における会計的管理の理解がもっと深まると期待される。

よって、本論文は博士（経済学）の学位論文としての価値があるものと認める。  
なお、平成28年2月3日に論文内容とそれに関連した口頭試問を行った結果、合格と認めた。